

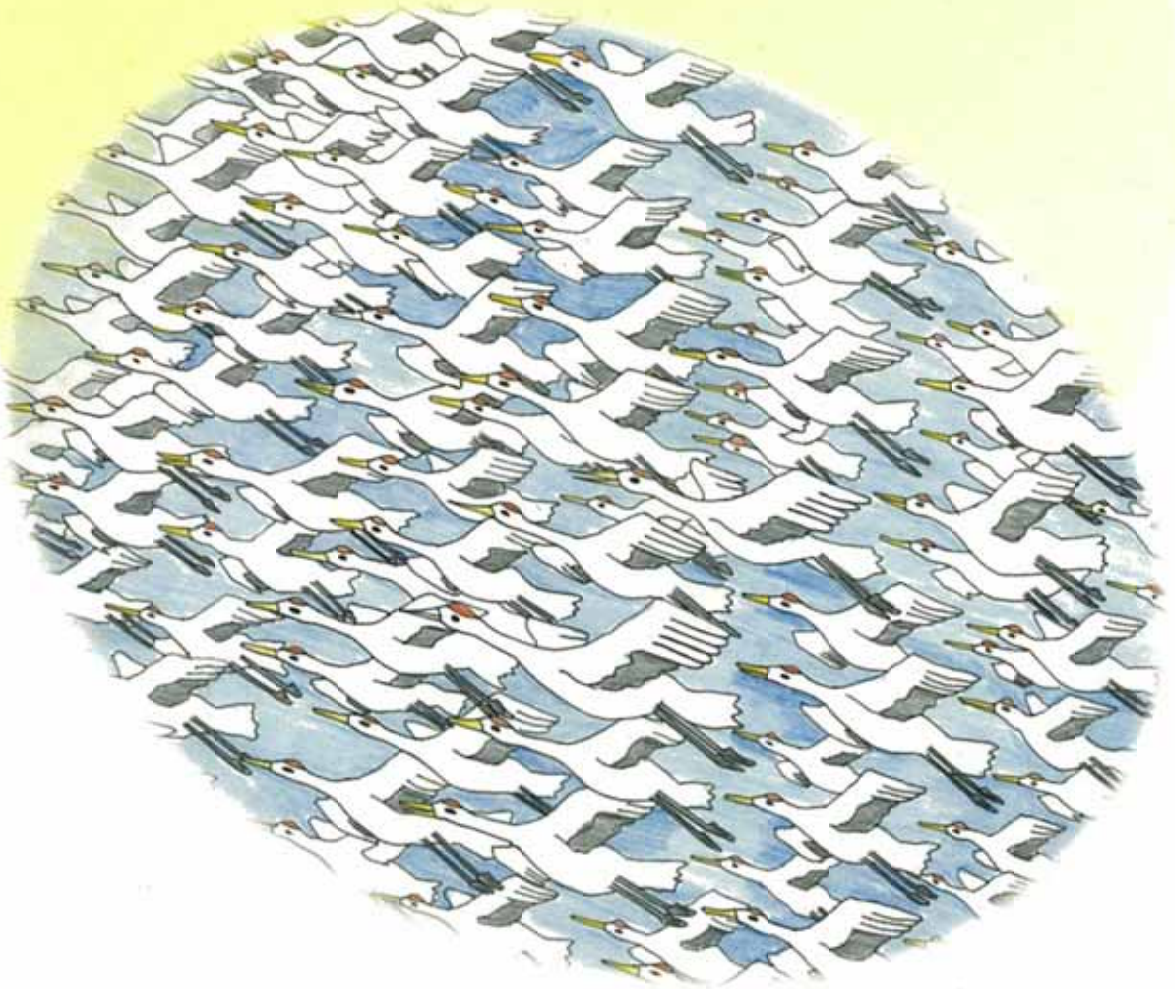
百羽のツル

花岡大学

作

前田晃宏

絵





冷たい月の光で、こごごごと明るい、
夜更けのひろい空でした。

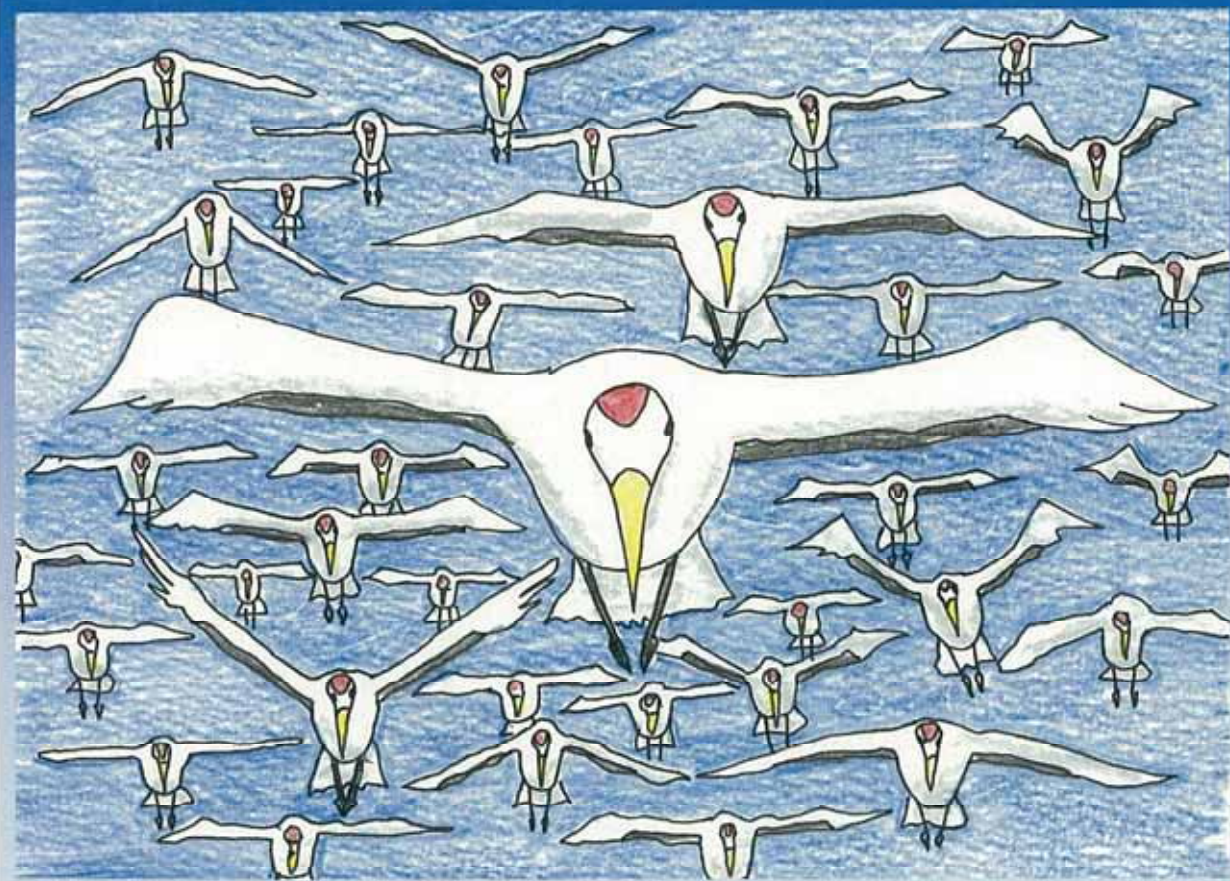
そこへ、北の方から、真っ白な羽を、

ヒフヒフとならしながら、百羽のツルが、
飛んできました。

百羽のツルは、みんな、同じ速さで、白い羽を、
ヒフヒフと、動かしていました。

首をのぼして、ゆっくりゆっくりと、
飛んでいるのは、疲れているからでした。

なにせ、北の果ての、
さびしいこおりの国から、昼も夜も、
休みなしに、飛び続けてきたのです。
だが、ここまで来れば、
行き先は、もうすぐでした。
楽しんで、
待ちに待っていた、きれいな湖のほとりへ、
着くことができるのです。





「下をいっくん、山脈だよ。」と、

先頭の大きなツルが、

嬉しそうに、言いました。

みんなは、いっときに、下を見ました。

黒々と、いちめんの大森林です

雪をかむった、高い峯だけが、

月の光をはねかえして、

はがねのように、光っていました。

「もう、あとひとときだ。

みんな、がんばれよ。」

百羽のツルは、目を、キラキラと光らせながら、
疲れた羽に、力を込めて、しびれるほど冷たい、
夜の空気をたたきました。

それで、飛び方は、今までよりも、

少しだけ、速くなりました。

もう、あとが、しれているからです。

残りの力を、出さきって、

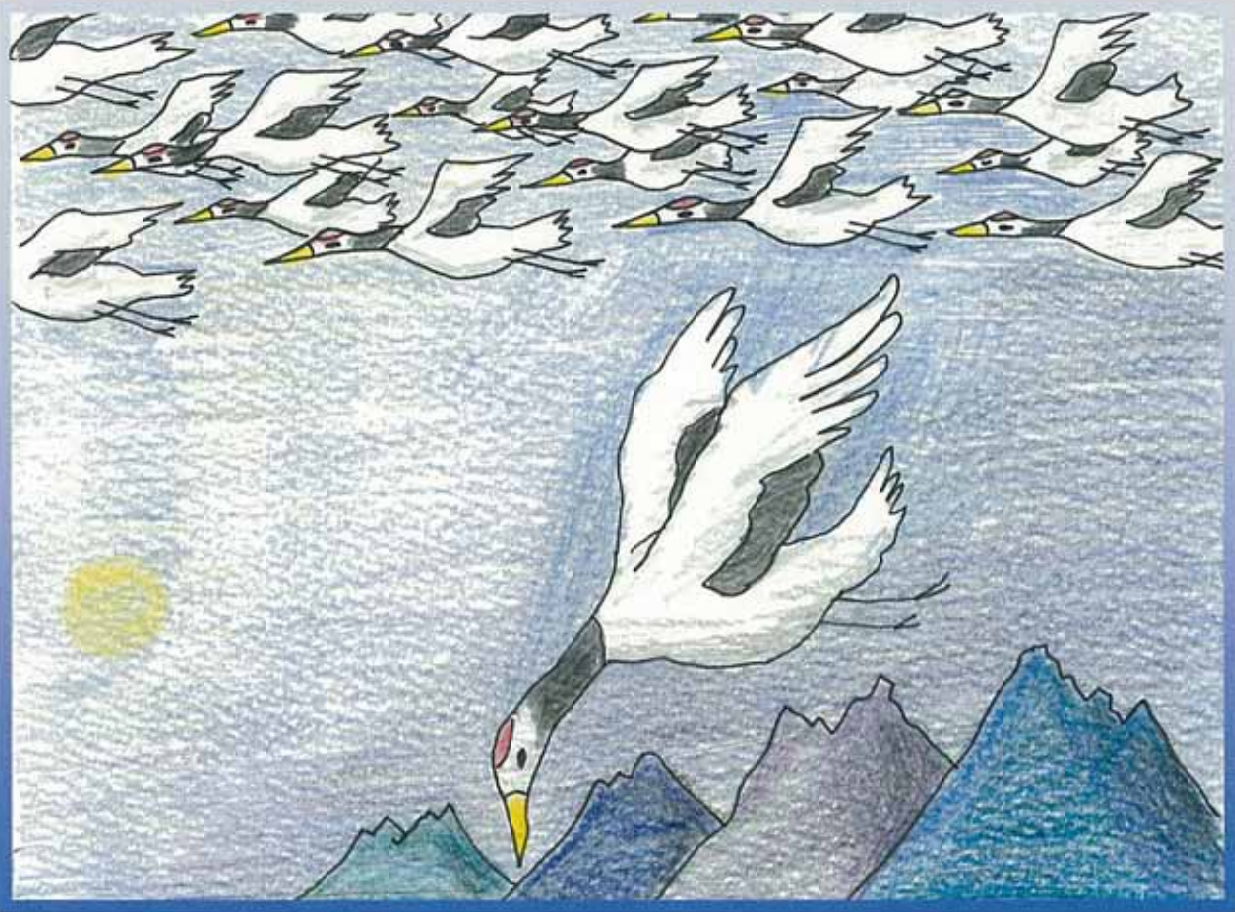
ちょっとでも早く、湖へ着きたいのです。

するとその時、一番後ろから飛んでいた、

小さな子どもツルが、

下へ下へと、おち始めました。





子どものツルは、みんなに、内緒にしていたが、病気だったのです。

いつまでついてくるのも、やっとでした。

みんなが、少しばかり速く飛び始めたので、

子どものツルは、ついていこうとして、

死にもの狂いで、飛びました。

それが、いけなかったのです。

あっという間に、羽が、動かなくなっていました、

吸い込まれるように、下へおち始めました。

だが、子どものツルは、みんなに、

助けを求めようとは、思いませんでした。

もうすぐだと、喜んでいる、みんなの喜びを、

壊したくなかったからです。



黙って、グイグイとおちながら、小さなツルは、
やがて、気を失ってしまいました。

子どもツルのおちるのをみつけて、

そのすぐ前を飛んでいたツルが、鋭く鳴きました。
すると、たちまち、大変なことが起こりました。

前を飛んでいた、九十九羽のツルが、いっときに、
さっと、下へ下へとおち始めたのです。

子どものツルよりも、もっと速く、

月の光をつらぬいて飛ぶ、銀色の矢のように速く、

おちました。そして、おちていく子どものツルを、

追い抜くと、黒々と続く、大森林のまあたりで、

九十九羽のツルは、さっと羽を組んで、

一枚の白い網となったのでした。





すばらしい九十九羽のツルの曲芸は、

見事に、網の上に、子どものツルを受け止めると、

そのまま空へ、舞い上がりました。

気を失った、子どものツルを、

長い足でかかえた先頭のツルは、

何事もなかったかのように、みんなに、言いました。

「さあ、もとのように並んで、飛んでいこう。

もうすぐだ。がんばれよ。」

こうこうと明るい、夜更けの空を
百羽のツルは、真っ白な羽をそろえて、
ヒフヒフと、空の彼方へ、
次第に小さく消えていきました。

